



8月4日(水) 札幌 中学教員対象

38 度の名古屋から、28 度の札幌に移動し、北海道でははじめての教室を開催する。会場は大通り公園すぐのところ。夕方には、青空ビアホールが開催されている。

参加者 31 名。札幌の先生だけでなく、名寄、紋別など北海道全体からの参加者が目立った。

第1講義 篠原代表 「中学教科書で教える経済のしくみ」

篠原代表は、私たちは、経済学を教えるのではなく経済を教えるのである、という指摘から講義を始められた。指導要領は書きすぎ、立派すぎ。しかし、社会のしくみが理解できるようには必ずしもなっていない。現実には制約条件がたくさんある中で、完全にやろうとするので破綻する。不可能なことをやろうとしている。それを突破して、生徒に興味や関心をもたせて、社会の仕組みを理解させるようにするのが、現場の教員の役割、と先生方を励まされた。

その上で、教科書の問題点を指摘される。教科書を読んでも、生徒が興味をもつことはありえない。一つの理由としては、悪いことはいっぱい書いてあるが、いいことがほとんど書かれていない。その例が企業の扱いである。したがって、善悪の二分法はやめたい。

一方、教科書は、触れるものは触れている。だから、多くの事実には振り回されるのではなく、社会の仕組みを考える「めがね」を持つ必要がある。そのために新学習指導要領では、概念を先に教えることになっている、と指摘される。

その概念は、経済で言えば、効率と公正である。効率とは、無駄を省くということである。この理解は意外とやさしい。公正の方が、本当は難しい。

このめがねで、経済の仕組みを教える、そのエッセンスは、分業と交換である。

企業が分業の核である。市場が交換の核である。その意味では、企業からはじめることが一番望ましい。希少性や家計の問題、同心円状の拡大にそれほど神経質になる必要はないのではとアドバイスをされる。企業の理解には、「現代の生産の仕組み」の図を利用すれば、生徒は納得するはずと指摘される。

現代の市場は、スミスの時代のような、多数の経済主体の自由な交換の場であるものはせいぜい三分の一である。ほかの三分の一は、企業間の市場であり、残りは政府が関わる公共財や公共サービス関連である。市場は効率、政府は公正という二分法は間違いである。政府の失敗は市場の失敗と同じように問題なのであると講義を進められた。

以上の講義の応用問題として、最低賃金の問題を考える。社会の仕組み全体を考えて、本当にヒトにやさしい政策であるのか考察してみるとよい。

もう一つは、広告の扱いである。改定されて記述がよくなったが、以前はだまされるな路線だった。これは、情報の非対称の問題であり、そこを押さえていないと、善悪の二分法になってしまう。

独占や公共料金（自然独占など）の書き方なども、同様の恐れがあるので、扱うときには注意をしておきたいと指摘されて講義をまとめられた。



第2講義 ブルサ

札幌では初めてであったが、やはり好評であった。

第3講義 大杉先生担当「中学公民的分野における経済の考え方・教え方」

名古屋と同一内容。やはり、提示された問題は解答された先生はいなかった。PISA型知識の獲得は教員も同じ課題を持っていることが明らかになったと言えよう。

第4講義 グループディスカッション

最初に、問題提起者として、大阪の奥田先生の実践報告を受けた。

奥田実践では、ネットショッピングに関する実践の例を通して、経済への関心を広げる授業の作り方が提案された。

それを受け、参加者を三グループに分け、それぞれ討議をした。

情報化がすすみ、教室でも自由にネットが活用できたり、電子黒板の活用がはじまったり、pp資料で授業をすすめているという報告があった。また、教科書だけで進行させる授業では、ばらばらで関連がつかまえさせることができないという悩みが提起された。新聞の切り抜きや、外部講師、小中高の連携やネットワーク作りが必要との指摘もあった。

貿易ゲームや株式ゲームなどの実践のときは、なぜという問いかけが必要という提起もされた。

先生方の取り組まれている実践や、その評価、社会科教員がひとりしかいない学校の先生も多く、新任2、3年の先生方の悩みや疑問などの情報交換ができたディスカッションであった。

文責：新井 明

■8月5日(木) 札幌 高校教員対象

高校の先生対象である。参加者16名。他の研修や学校行事(講習)などが重なり、参加数がややさびしかったが、それでも熱心な講義やディスカッションが行われた。

第1講義 篠原代表 「高校教科書で教える経済の仕組み」

名古屋講義と同一内容。

国際収支表では、外貨準備の箇所の理解がなかなか難物であることが先生方の反応から伺えた。

第2講義 榊原宏司氏 「高校教科書で教える金融・証券の仕組み」

名古屋講義と同一内容。



第3講義 中川雅之先生 「大学入試には載っていない教科書には載っていない経済概念の考え方」(略称「大学入試問題解説」)

これは今年度はじめての企画である。

ネットワークが昨年取り組んだ入試問題プロジェクトでの問題提起のなかから、教科書には載っていない内容で、経済学的には重要な問題や、教科書にはあるが、不十分な内容に関する問題を解説するという内容の講義である。あらかじめ、入試問題集と解説の用語集を配布。それをもとに講義が進められた。

取り上げられた項目は、余剰分析、外部経済の内部化、国民経済計算体系の三つであった。

問題では、青山学院国際政経学部 2008 年、日本大学経済学部 2009 年、早稲田大学政経学部 2009 年の問題である。

余剰分析では、余剰概念は経済学の理解、特に市場の効率性を理解するには必須であるが、高校の教科書では扱われていない概念である。外部不経済の内部化も、しっかり理解するには余剰概念が必要であるとの指摘がされた。

青山学院の問題の、四つの小問のうち、前二者は、相対取引の事例であり、経済学的な意味、現代的な意味からいえばあまり有意義な問題ではない。それに対して、あとの二題は、オークショナーが存在する事例、つまり市場経済の取引事例を問題としているので、それなりに意義のある問題である。しかし、ある種のパズルを解くというだけの問題になっているので、あと一步、この事例がどんな意味を持つかを考えさせるような設問があるとよいと思うと評価された。

外部不経済の問題は、解説集の数値例を追うことで、理解できる。このような理解を前提として、この問題は理解できるはずである。

国民経済計算体系の問題は、知識問題の部分は、高校生のレベルを超えて、細かすぎる。これを知っていて何か意味があるのかわからない。私も知らないものもある。実質国民所得を計算させる問題は、たしかに指示に従えばそのとおりなのだが、同じく、それをやることで、経済の仕組みが分かるのか疑問である。専門家なら必要であるが、入試問題でそれを出すことで意味があるかはわからない。計算は、数学というより算数であるが、煩瑣であり、正解を出す受験生は少ないであろうと指摘された。

最後に、ローレンツ曲線、ジニ係数の解説を行い、講義を締めくくられた。



第4講義 グループディスカッション

参加者が少なかったこともあり、1グループで実施した。北海道の参加者10名。

最初に、札幌旭丘高校の川瀬先生から、問題提起を受けた。経済を学ぶときに具体的な事実と、それを理解するための理論や概念とのギャップをどう埋めるかが問題。リテラシーのための最低限の概念は何か明確になって欲しい。など。

ディスカッションでは、実践報告とそれに関するアドバイスが行われた。

篠原代表は、概念をまず教える構造になっている中学の新学習指導要領を紹介し、仕組みや、考えさせる授業ができるとよいとアドバイスをした。

実践報告では、貿易ゲームの有効性、統計の取り方などが紹介された。また、書かせる実践では、2030年の北海道を予測させ、それをA4版1枚にまとめてプレゼンをして、質疑をするという実践が報告された。理論や概念に関しては、機会費用、比較優位の概念の理解やその射程はどこまであるか、が議論となった。余剰をベースに、また、希少性や機会費用をベースに、テキストを書き換えてみる試みなどもよいのではという提言もあった。

生徒の素朴な疑問の事例では、薄利多売の事例が出され、それは二重価格の問題であり、その点を踏まえて指導する必要があるとのアドバイスがあった。

高校生にとっては、取り上げられる事象を「なぜ」という視点から考えさせるような授業であれば、仕組みを理解することが出来る。年金問題など、考える課題、素材は多いし、地域の経済という重要問題もあり、経済教育の役割は大きいというまとめがされ、ディスカッションは終了した。

文責：新井 明